

SHOW HEY シネマルーム

★★★★★

冷たい雨に撃て、約束の銃弾を (復仇/Vengeance)

2009年・フランス、香港映画
配給/ファントム・フィルム・108分

2010(平成22)年6月6日鑑賞

シネ・リープル梅田

Data

監督: 杜琪峰 (ジョニー・トー)
出演: ジョニー・アリディ/シルヴィー・テストュー/黄秋生
(アンソニー・ウォン)/林家棟(ラム・カートン)/林雪(ラム・シュ)/任達華(サイモン・ヤム)/張兆輝(チヨン・シウファイ)/黄日華(フェリックス・ウォン)/バグ・ウー/邵美琪(マギー・シュウ)/ヴィンセント・ズエ

👁️👁️ みどころ

アイデア良し! 脚本良し! 撮影良し! そして俳優良し! そうなりゃ鬼に金棒。杜琪峰(ジョニー・トー)監督の大人向けハードボイルドの完成型がここに登場! キーワードは復讐、約束、記憶喪失そして男の美学。

北野武監督の『アウトレージ』(10年)の特徴は我鳴り立てる「全員悪人」だったが、本作の殺し屋はみんなクールで紳士的。死ぬも美学、生き残るも美学のカッコ良さをタップリと。もっとも、この長い邦題はナニ?—工夫を。

— * — * — * — * — * — * — * — * — * — * — *

■□■俳優良し! 「フランスのプレスリー」が! ■□■

台湾出身の李安(アン・リー)監督と同じように、香港出身の呉宇森(ジョン・ウー)や徐克(ツイ・ハーク)などの著名監督は次々とハリウッドへ進出した。ところが杜琪峰(ジョニー・トー)監督だけはそんな流れに乗らず、香港で骨を埋めるかのように香港で監督業を続けてきた。彼のエポックメイキング作が『ザ・ミッション 非情の掟』(99年)だが、私はそれを観ていない。私が彼の作品で観たのは『ターンレフト ターンライト』(03年)(『シネマルーム17』209頁参照)、『柔道龍虎房』(04年)(『シネマルーム17』90頁参照)、『エレクション』(05年)(『シネマルーム17』67頁参照)、『エグザイル/絆(EXILED放・逐)』(06年)(HP掲載)、『天使の眼、野獣の街』(07年)(HP掲載)、『僕は君のために蝶になる(蝴蝶飛/Linger)』(07年)(『シネマルーム21』112頁参照)だが、これらはいずれも面白い映画。『ザ・ミッション 非情の掟』の発展型となる(?)ハードボイルド作品が『エレクション』と『エグザイル/絆』だが、これらは劉偉強(アンドリュー・ラウ)監督の『インファナル・アフェア』(02年)(『シ

ネマルーム3』79頁参照)、『インファナル・アフェア〜無間序曲〜(INFERNAL AFFAIRS II)』(03年)、『シネマルーム5』336頁参照)、『インファナル・アフェアⅢ/終極無間』(03年)、『シネマルーム17』48頁参照)とは少しテイストの異なるジョニー・トー映画の真骨頂。

しかして、本作は『ザ・ミッション 非情の掟』『エグザイル/絆(EXILED放・逐)』に続く「ノワール・アクション3部作・完結編」。本作でストーリー構成の軸となる3人の殺し屋クワイ、チュウ、フェイロクを演ずるのは、ジョニー・トー組の常連・黄秋生(アンソニー・ウォン)、林家棟(ラム・カートン)、林雪(ラム・シュ)。そして組織のボス、ジョージ・ファン役に登場するのが、同じくジョニー・トー組の常連・任達華(サイモン・ヤム)だ。それだけでも十分豪華だが、本作にはその上に「フランスのプレスリー」と言われるフランス人のベテラン俳優ジョニー・アリディが何とも個性的なフランシス・コストロ役に参加する。さらに『エディット・ピアフ 愛の讃歌』(07年)、『シネマルーム16』88頁参照)でセザール賞助演女優賞に、『サガン—悲しみよ こんにちは—』(08年)(HP掲載)で主演女優賞にそれぞれノミネートされたシルヴィー・テステューが、コストロの娘アイリーン・トンプソン役に参加。まずは、そんな豪華な俳優陣に注目!

■脚本良し! 撮影良し! マカロニ・ウエスタンを彷彿? ■

セルジオ・レオーネ監督、クリント・イーストウッド主演の『荒野の用心棒』の登場は1964年。その後マカロニ・ウエスタンが続々とつくられるきっかけとなった名作に高校生の私は夢中になったものだ。これは、ある町にやってきたクリント・イーストウッド扮するガンマンが町の支配権をめぐる対立する2派を巧みに操って共倒れさせたいウカッコよく町を去っていくという、ストーリーとしては割と単純なものだった。しかし、これに続く『続・荒野の用心棒』(66年)は、敵に捕まって半殺しにされ、銃の利き手を潰されてしまったフランコ・ネロ扮するジャンゴの、あっと驚く仕返しが衝撃的だった。

しかして本作は、中国人と結婚し2人の子供と共にマカオの高級住宅地で暮らす愛娘アイリーン一家が惨殺されたことに対する父親コストロの復讐劇。奇跡的に一命をとりとめたアイリーンから聴き取れた犯人像についてのヒントは、犯人は3人組であることと、そのうちの1人の耳にケガをさせたこと。この復讐のためにコストロが現地で依頼した殺し屋が、クワイ、チュウ、フェイロクの3人だが、その展開はいかに? 本作の復讐劇が面白いのは、何といてもハラハラドキドキの脚本。そして映画冒頭にみる一家惨殺事件の撮影も強烈だ。かつてのマカロニ・ウエスタンの名作を彷彿させる脚本と撮影に注目!

■アイデア良し! 喪失していく記憶との競争は? ■

最近、韓国映画『私の頭の中の消しゴム』(05年)、『シネマルーム9』137頁参照)、渡辺謙主演の『明日の記憶』(06年)、『シネマルーム10』172頁参照)などの若年性

認知症、『きみに読む物語』（05年）（『シネマルーム7』112頁参照）などの老人性認知症をテーマとした映画が多い。本作においてコストロとクワイをリーダーとする3人組の殺し屋との間で「復讐委任契約」の合意ができるのは映画中盤だが、面白いのはその時点でコストロがクワイ、チュウ、フェイロクの顔写真をポラロイドカメラで撮影し、その写真1枚毎に名前を書いていくシーン。もちろん、殺し屋はおおっぴらに名乗ることができる職業ではないから、おっちょこちょいの(?)チュウはともかく、リーダー格のクワイは顔写真を撮られることを拒否したが、コストロは「忘れるといけないから」と強引に写真撮影を敢行。それまであんなにカッコ良く動いていたコストロがなぜ、3人の顔と名前ぐらい一発で覚えられないの？

誰もがそんな疑問を持つはずだが、そこが本作のアイデアの面白さ。コストロとクワイ、チュウ、フェイロク3人の間に男の友情と信頼関係が芽生え始めていく中ではじめて明らかにされるのは、コストロの頭の中には銃弾が残っているため、近い将来すべて記憶を失ってしまうこと。コストロは愛娘のアイリーンに対して3人組の殺し屋への復讐を誓ったが、もし復讐すると誓った記憶それ自体が消えてしまったら一体どうなるの？法的に言っても、復讐の委任契約をした一方の当事者が契約したこと自体を忘れてしまえば、契約そのものが失効してしまうのでは？本作を抜群に面白くさせたのは、そんなアイデアだ。

コストロの記憶がなくなってしまうてもなお、男の約束を守ろうとするクワイ、チュウ、フェイロクの「男の美学」もさすがだが、記憶を失ってなお、復讐を果たすためにコストロがとっていく、ラストの展開は秀逸。そこにビッグ・ママと呼ばれているクワイの妻（葉璇/ミシェル・イエ）が登場するが、その役割もユニークで面白い。そんな面白いアイデアに拍手！さあ喪失していく記憶とのスピードの競争は？

■□■ジョージ・ファンのキャラも見事にキマリ！■□■

本作では、コストロとクワイ、チュウ、フェイロクのキャラはストーリーの軸として早くから明らかになるが、クワイ、チュウ、フェイロクに命令を下している組織のボス、ジョージ・ファン（任達華/サイモン・ヤム）のキャラはイマイチ不明なまま。コストロとクワイ、チュウ、フェイロクが知り合う(?)のは、クワイ、チュウ、フェイロクがファンから命じられた「ある仕事」を実行した直後だが、なぜファンはそんな命令を？それは「美しい妻が若い組員との間でデキている」とファンがにらんだためだが、本作にみるファンの嫉妬心の表し方は興味深いから是非そこに注目！

このエピソードによって、ジョニー・トー監督はファンがかなりスケベな男だということをお印象づけるが、それが生きてくるのがラストのクライマックスシーン。既にクワイ、チュウ、フェイロクとどんな契約を交わしたかも記憶から消え去り、今はなぜ自分の持っている拳銃にジョージ・ファンと書かれているのかすらわからなかったコストロは一体どうやってウルフラ3人組の殺し屋に命令を下したファンへの復讐を果たすの？

そこで登場するのが、ある1人の美女だが、この美女が一体誰かすぐにわかる人は少ないのでは？それはともかく、ファンがこの美女に興味を示したため、クライマックスの銃弾戦が生まれることになるから面白い。本作ではジョニー・トー組に欠かせない常連俳優の任達華が悪役としてその存在感を見せつけているが、そのキャラも見事にキマリ！



『冷たい雨に撃て、約束の銃弾を』 価格：1,200円（税別）
発売元：アスミック 販売元：ハビネット
©2009 ARP_MEDIA ASIA ALL RIGHTS RESERVED

■□■死ぬも美学！生き残るも美学！■□■

日本の侍は常に死を覚悟して日々の務めに励んでいたから、いつ殿様から切腹を命じられても喜んでそれに従うという心構えができていた。その点、鶴田浩二、高倉健の任侠路線の時は日本のヤクザも真の任侠道を追究していたが、菅原文太の実録路線になると美学よりも実利が先行し、最新の北野武監督の『アウトレージ』（10年）になると、「全員悪人だらけ！」の宣伝文句のとおり、欲ボケ集団（？）の集まりになっている。しかし、マカオと香港を舞台とした本作における殺し屋は、クワイら3人組もアイリーン一家を襲ったウルフラ3人組も殺し屋としてのプライドがブンブンにおっている。クワイら3人組の美学は、たとえコストロが約束を忘れても、「俺たちは忘れない」として、危険をかえりみず約束を果たすべく前に突き進む生き方に顕著。

他方、ウルフラ3人組も、バーベキュー場となっている森の中で家族との楽しいひとときを過ごした後は、相手が4人だとわかっていてもいさぎよく銃撃戦に臨む姿勢に顕著。ラストに向けた1つのハイライトはクワイ、チュウ、フェイロクとジョージ・ファン率いる大軍団との銃撃戦。これは、『アラモ』（04年）に登場したアラモの砦を守るデイヴィ・クロケットやジム・ボウイ率いる少数の守備隊がサンタアナ將軍率いるメキシコ軍の大軍の前に全滅するシーンを彷彿させるが、そこで死んでいく3人の男たちの美学に感動。

本作の本当の意味でのハイライトはその後に訪れるコストロとファン本隊との銃撃戦だが、そこで生き残るのがコストロ。鶴田浩二も高倉健もそして高橋英樹も藤純子もケジメをつけた後は1人生き残っていたが、そりゃカッコいいものだった。本作におけるコストロの生き残り方はそんなパターンとは全く違うユニークなものだが、それはそれで実にカッコいい。頭の中に銃弾が残っているコストロにとっては、これぞまさに男の美学！

■□■この長い邦題はナニ？—工夫を！■□■

本作の原題は『Vengeance 復仇』、つまり英語でいうリベンジ=復讐。それに対して邦題は『冷たい雨に撃て、約束の銃弾を』とバカ長い。私が映画館に行ったのは日曜日夜のレイトショーだったが、観客は約10名。それは、こんな名作にもかかわらずこんな長ったらしい邦題のため、本作が映画ファンに浸透していないことが一因では？本作を貫くキーワードは男の美学。そして、次第に喪失していく記憶という珍しい設定を前提とした「約束」。したがって「約束の銃弾」という言葉を遣うのはいいが、「冷たい雨に撃て」という説明は不要では？—工夫を願いたい。

2010（平成22）年6月8日記